



from 東北

全国諸教会・伝道所の皆様、日頃からお支えと励ましをありがとうございます。コロナウイルスの影響で被災地でのお茶会などはできませんが、12月には牡鹿半島と大槌町を訪れて、クリスマスの喜びをお分かちするためにお花を届けたいと計画しています。委員会もZOOMを用いて開催できるようになりました。今号は、現在の牡鹿半島と東京電力福島第一原発周辺の様子を報告します。

### 牡鹿半島、被災地からの報告 宮城チーム

9月15日、宮城チームで支援をしてきた牡鹿半島の5つの浜、牧浜、給分浜、鮎川、荻浜、月浦を訪問してきました。牡鹿半島の入り口は、曲がりくねった道を直線化する工事が大分進み、一部は通行できるようになっていました。また、給分浜の海岸沿いの道路は、かつては波除けの黒い袋が並び、それを越えて波しぶきが降ってきていたものですが、防潮堤がほぼ完成し、道路から海は見えなくなっています。

牧浜の東浜小学校は今、2学級7人の児童数です。昨年度まで小学校に間借りしていた荻浜保育所は2名いた児童が卒園して閉じられました。校長先生にお会いして、今年も12月にシクラメンをお届けすることをお伝えしました。牧浜区長で、災害対策本部長としてご苦労された豊島富美志さんは、ずっと西南学院ボランティアチームの受け入れに関わってくださった方です。人間味あふれる人柄に触れ、学生たちは今でも個人的に、一人で、友人と、あるいは家族を連れて豊島さんを訪ねてくる方がいるとのこと。東浜小学校敷地に建てられていた災害対策本部の小屋の壁板には、支援に訪れたボランティアの名前が一面に記されています。震災から9年余り、消えかけたものもある中、新しい文字も見られました。小屋の中には当時の写真や、その後に訪れた方々の残した絵や写真が貼られています。震災当時苦労した方々の姿を彷彿とさせます。小屋は風雨にさらさ

れて痛みが進んでいますが、このまま朽ち果てさせるのは惜しいと思われました。

新型コロナウイルスの影響は都会から離れた牡鹿まで及んでいます。マスクをつけたり、密接、密集、密閉にならないように気を配っているとのこと。荻浜のある若者は、料理人になろうと東京で修行していたのですが、新型コロナ流行による店の休業により、地元に戻り、実家の牡蠣養殖を一から習い始めたとのこと。浜の将来を担う後継者が育っているようです。

商業捕鯨が31年ぶりに再開されましたが、その拠点の一つ、鮎川浜では海拔6メートルの防潮堤の上に「ホエールタウンおしか」が建てられ、7月に総合オープンしました。捕鯨基地として栄えた地域の文化などを学べる「おしかホエールランド」、半島の自然環境や暮らしを紹介する環境省の「牡鹿半島ビジターセンター」、市の観光物産交流施設「Cottu(こっつ)」という3施設が入っています。「こっつ」という愛称は「すてきな時間が過ごせるのはこっち」という意味を込めて、ホエールタウンのインフォメーションで働く鈴木ひろみさんが発案したそうです。鈴木さんは震災後、2012年9月から7年間、情報誌「牡鹿ふるさと通信」を発行し、牡鹿地区の方々に地元の様々なできごとを発信してきた方です。皆さんそれぞれ、ふるさとの復興のために励んでおられる姿を拝見でき、感謝の訪問となりました。(仙台教会 一瀬千恵子)



東浜小学校



移築された災害対策本部



豊島区長さんと



給分浜の食堂かんださんと



鈴木ひろみさん



ホエールランドの捕鯨船

### 東京電力福島第一原発周辺視察報告 宮城チーム



事故当時のままの双葉駅前通り



新設された双葉駅



富岡町夜ノ森駅前通り



夜ノ森駅前空間線量(0.679 μSv/h)



請戸港から見える原発排気筒

2020年9月11日、大島博幸牧師の案内で現地支援委員会宮城チームのメンバーが東京電力福島第一原発(以下、「原発」と表記)被災地域を訪ねました。原発から20~30キロ圏内の浪江町は、海側の請戸地区の放射線量は低いものの、市街地近くに高線量の地域があります。また、山側に行くほど線量が高く、いまだ汚染度の高いスポットが点在。特に、津島地区は村全体が人の住めない帰還困難区域で、ふるさとを奪われた住民は、今も県内外で避難生活を続けています。このように、町内には帰還困難区域がある中、今年8月大きな「道の駅」が開所し、今後、酒蔵と焼き物工房が整備されて地域の名産を発信するという計画があります。

富岡町では、今年3月の常磐線再開に合わせ、夜ノ森駅周辺の道路の避難指示が解除されましたが、道路1本を除き駅周りの家々はバリケードで封鎖され、その異様に言葉がありません。原発が立地する双葉町では、双葉駅と駅前など一部地区で避難指示が解除されたのですが、町の殆どが帰還困難区域のままで町民の避難は続いています。帰還困難区域の民家の入口はバリケードが設置され、事故当時のまま9年間車が放置され、倒壊した家屋もあります。かけがえのない生活、人生が原子力災害で奪われて

いることを思い知らされます。

国道6号の海側の町内には、除染で出た汚染土壌などを長期貯蔵する中間貯蔵施設が広がり、県内各地から放射性汚染物質で汚染された廃棄物を積んだ無数のダンプが町内を行き交っています。

双葉駅前の告知板(双葉駅周辺に立ち寄られる方へ)には、「双葉駅周辺には、1) 避難指示が解除された区域 2) 引き続き立ち入りが制限されている区域 3) 立ち入りできるが避難指示が継続している区域があります。一時的に訪問する場合は、長時間の滞在は控えること、また、区域内での宿泊ができないこと」等書かれています。夕方に注意を知らせるアナウンスが流れ、長時間滞在するのは危ないのだと、はっとさせられます。帰還困難区域が解除されつつある中、依然として高線量の危険性があることを痛感させられる訪問でした。新型コロナウイルス拡大で、原子力災害のことは消えてしまったかのような今ですが、原発被災地を訪ねて改めて思います。原発事故は終わってはならず、被災者の苦しみは続いていることを忘れてはならない、と。(南光台教会 笠松絹子)